戦時下の軍国主義教育における『竹取物語』の教材化とその影響

斉　藤　み　か

Ⅰ．序論

『竹取物語』は平安時代の物語作品の中で、現代において最も有名な作品の一つであるといえる。その理由の一つに、『竹取物語』が教材として教科書に採録されているということがある。もう一つは、おとぎ話としての「かぐや姫」に触れたことがある人が多いということである。国定国語教科書に採録された「かぐやひめ」は『竹取物語』の教材化の例としてこれまでの研究においても取り上げられてきた。教材化の例としても示唆的であるが、国定国語教科書の「かぐやひめ」は『竹取物語』が童話化される過程としても重要である。

日本では 1903 年 4 月の小学校令改正により、国が定める国定教科書を用いる国定制度が実施されるようになる。これにより、翌年の 1904 年から終戦後にかけて、国定教科書が改訂を経て第一期から第六期まで編纂された[1)]。『竹取物語』をもとにした「かぐやひめ」が採録されるのは、第四期（1933 年－1940 年）からである[2)]。その後、第五期、第六期と続けて採録され、1950 年以降の小学校国語教科書にも引き続き採録されている。国定国語教科書の「かぐやひめ」は『竹取物語』の教材化としてこれまでも取り上げられてきた。しかし、その影響としておとぎ話・昔話の「かぐや姫」が形成されるという童話化の側面については十分に検討されていない。

本論文では国定国語教科書における『竹取物語』の教材化の過程を、童話化という視点から検討する。まず、国定国語教科書「かぐやひめ」と原典『竹取物語』の相違点についてまとめる。次に、第四期・第五期の国定国語教科書の思想について取り上げ、「かぐやひめ」が採録された背景と、教材として担わされた役割について考察する。最後に、現代への影響について述べる。

Ⅱ．国定国語教科書「かぐやひめ」と『竹取物語』の相違点

1．原典『竹取物語』からの採録箇所

国定国語教科書の「かぐやひめ」は、第四期から第六期まですべて、当時の現代語によって内容をまとめ直したものである。分量としても、原典『竹取物語』と比較すると短く、一部をまとめ直したものとなっている。原典である『竹取物語』の要素のうち、どの部分が採録されているかという点に関しては中嶋真弓の「小学校国語教科書教材『かぐやひめ』採録の変遷」[3)] や金子美保の「国定国語教科書における『竹取物語』の教材化」[4)] が詳しい。

原典である『竹取物語』の内容は次のようなものである。竹取の翁がある日、光る竹の中に三寸ほどの人を見つけ、家に持ち帰る。それから竹の中に黄金を見つけるようになり、翁は裕福になる。三寸ほどだった人は三か月で成人の大きさになり、斎部秋田が「なよ竹のかぐや姫」と名付け、成人の儀式を行う。多くの男性がかぐや姫を一目見たいと集まるが、かぐや姫は誰とも結婚しようとしないため、翁が特に熱心な五人の貴公子の中から一人を選ぶよう説得する。かぐや姫は五人それぞれに難題を出し、達成できた人と結婚すると約束する。五人はそれぞれ難題に挑むが誰も達成することができない。噂を聞いた帝がかぐや姫を宮中に呼ぶが、かぐや姫はこれにも応じず、帝は翁の手引きで翁の家を訪れかぐや姫に会う。帝が連れて帰ろうとするとかぐや姫は光になって消えてしまったので、連れて帰ることは諦めるが、その後三年ほど、手紙のやりとりをする仲になる。かぐや姫が自分は月の都の者でもうすぐ迎えが来ると告白し、帝の兵と翁が阻止しようとするが月の都の人たちに連れられてかぐや姫は月に帰ってしまう。帝はかぐや姫が残した不死の薬と手紙を富士山で燃やすよう指示し、その煙がいまだに立ち上っている。

採録箇所については、第四期・第五期はほとんど同じで、次の通りである。①竹取の翁が小さな女の子を光る竹の中から発見する、②竹からお金が出てきておじいさんが裕福になる、③女の子は美しい娘に成長し、かぐや姫と名付けられる、④多くの人が結婚を申し込むがかぐや姫は拒否する、⑤「とのさま」からも求婚されるがかぐや姫は断る（第四期のみ）、⑥かぐや姫が自分は月から来たことを告白する、⑦兵士を集めて備えるがかぐや姫は月の人に連れられて月に帰ってしまう。

国定国語教科書「かぐやひめ」と原典『竹取物語』との大きな相違点は、求婚譚の有無である。『竹取物語』においては、五人の求婚者が難題に挑む顛末が一人ずつ丁寧に描かれている。この求婚譚は分量も多く、絵巻や絵本等でも一人につき一図以上が絵画化されることが多い、物語の中心部分である。また、1889年に作られたちりめん本、*Princess Splendor: the wood-cutter's daughter.*[5] においても、求婚譚は省略されることなく五人分丁寧に描かれている。一方、国定国語教科書においては、求婚譚にあたる部分は下記のように簡単に触れられるだけである。

> そのうち　に、世間　の　人々　は、かぐやひめ　の　こと　を　聞いて、「じぶんが　むこ　に　ならう。」「私　の　よめ　に　下さい。」と申しこみました　が、かぐやひめ　は　どうしても　しょうち　しません。　おぢいさん　も、「じぶん　の　ほんたう　の　子で　ない　から、私　の　思ふ　やう　には　なりません。」と　いって　ゐました[6]（第四期）。

> 世間では、光るやうに　美しい　かぐやひめの　ことを聞いて、
> 「むすこの　嫁に　したい。」

「いや、うちへ　もらひたい。」
などと　いふ　人が、　たくさん　ありました。何ごとにも　すなほな　かぐやひめでしたが、いつも　おぢいさんに、
「私は、どこへも　まゐりたう　ございません。」
と　いって、ことわって　もらひました[7]（第五期）。

また、帝の求婚も第四期・第五期の国定国語教科書においては省略されている。第四期では「のちには、とのさま　から、おく方　に　したい　と　の　おことば　も　ありましたが、かぐやひめ　は　それ　も　おことわり　いたしました」[8]という形で「帝」を「とのさま」に変えて、求婚があり、それを断ったということのみが書かれている。原典『竹取物語』においては、実際に帝が翁の家を訪問し、かぐや姫と対面する場面や、その後三年にわたりかぐや姫と帝が手紙をやりとりする仲にあったことなどが書かれているが、こうしたエピソードは一切削除されている。また、第五期になると「とのさま」からの求婚もなく、多くの人の求婚を断ったという記述の次はかぐや姫昇天の段に入る形になる。

つまり、第四期・第五期国定国語教科書の「かぐやひめ」は、物語の中心に位置する求婚譚を省略し、かぐや姫の生い立ち・昇天部分だけをまとめている形である。求婚譚が省略された背景については、例えば次のような記述がある。第四期国定国語教科書編集を担当した一人である各務虎雄は、第四期国定国語教科書「かぐやひめ」の「要説」において次のように述べている。

皇子の求婚にも應じなかつたといふことは、教育上穏やかでない。況やかぐや姫の噂を聞召された帝の行幸まで仰ぎながら、遂に叡慮に背いて入内をしなかつたとある説話は、絶對にその登載を避くべきであり、且兒童の理會にも遠いと思はれる。のみならず、八月十五夜、帝の仰を受けた二千人の六衛の司までが、月の都からの迎を防ぐことができなかつたといふことは、これまたわが國體・國情に照らして、たうていそのまゝで兒童に授けることはできない[9]。

五人の求婚者のうち、二人は皇子である[10]。皇子の求婚に応じないということは「教育上穏やかでない」とされ、また帝の求婚拒否は当然掲載できる内容ではないとされていることがわかる。

また、第五期国定国語教科書についても、文部省『よみかた　教師用第四』の教材の趣旨において次のように説明されている。

随つてこの教材には、兒童の教育上頗る不適當であるかの求婚に狂奔した五人の貴公子や、朝廷への入内の話などのことは當然省略され得るのであつて、いはば小説竹取物語

が原據としたと思はれるかぐや姫傳説に却つて近づくものといふべきである[11]。

ここでも求婚譚の部分は教育上不適当であると判断され、帝の求婚に関しては当然掲載できないとされている。

採録箇所に関していえば、原典『竹取物語』と第四期・第五期の国定教科書「かぐやひめ」との最も大きな差異は求婚譚の省略であるといえる。高橋宣勝は「この『かぐやひめ』は小学生用に書き直されたものである。それゆえ大幅な簡略化がされているのは当然で、その最も極端なものは五人の求婚者と難題のエピソードである」[12]と指摘する。一方で高橋は、「しかしそうした簡略化がなされていても、ストーリーは、かぐやひめの竹中の誕生から十五夜の晩の昇天にいたるまで、『竹取物語』を忠実に追っている」[13]とも述べる。金子も「本文は必ずしも原典に忠実ではなく、いくつかの点において差異がみられるものであった（中略）しかし、我が国に古くから伝わるかぐや姫にまつわる物語の骨格はそれなりにおさえられるものとなっている」[14]と指摘する。国定国語教科書「かぐやひめ」は、帝の求婚を含む求婚譚が省略されていることを除いて、概ね『竹取物語』の内容を忠実にまとめていると考えられているのである。たしかに、竹の中にいたかぐや姫が短期間で大きくなり、やがて月に帰っていく、という出来事だけに着目すれば、それほど原典から遠いものではない。しかし、物語の主題を考えると、国定国語教科書「かぐやひめ」は原典とは全く別の物語になっている。

2. 羽衣の欠如と「ご恩」の追加

帝の求婚を含む求婚譚の省略は、採録箇所という観点から見れば原典と最も大きく違う点ということになる。しかし、『竹取物語』の主題を考えたとき、最も大きな変更点はかぐや姫昇天の場面にある。かぐや姫昇天の場面自体は、第四期・第五期国定国語教科書「かぐやひめ」にも登場する。しかし、『竹取物語』においてこの場面で重要な羽衣と不死の薬は出てこない。

『竹取物語』において、かぐや姫は月の人に促されて不死の薬を「いささかなめたまひて」（いくらかおなめになって）[15]とある。そして、月の人が羽衣を着せかけようとするのを制して「物一言いひ置くべきことありけり」（一言、言っておかなければならぬことがあるのでした）[16]と言って帝に手紙を書き始める。その理由はかぐや姫自身によって「衣着せつる人は、心異になるなりといふ」（天の羽衣を着た人は、心が常の人間のそれと変わってしまうということです）[17]と説明される。つまり、羽衣を着ると人間の心を失ってしまうのである。実際に、羽衣を着せかけられたかぐや姫は「翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりにければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ」（翁を、「気の毒だ、不憫だ」と思っていたことも、かぐや姫から脱け出てしまった。この天の羽衣を着た人は、物思いが消滅してしまうので、そのまま飛ぶ車に乗っ

て、百人ばかりの天人を引き連れて、月の世界へ昇ってしまう）[18] と、翁への愛情を失って、何も思うことなく月に帰ってしまうのである。つまり、原典『竹取物語』ではかぐや姫が月の人に戻るために、不死の薬と羽衣という二つの物が必要とされているのである。月の人は、美しく不老不死であるが心を持たないことが作中で説明される。不死の薬と天の羽衣は、月の人のこうした特徴と合致する。不死の薬はかぐや姫を再び不死の身体にし、羽衣は心を消失させるというわけである。

この「人間の心を消失させる」という羽衣の機能は、『竹取物語』に固有のものである。『竹取物語』は所謂「羽衣説話」の類型を用いていると考えられるが、「羽衣説話」において羽衣は天人の飛翔のための道具である[19]。天人の飛翔の道具だった羽衣に、『竹取物語』の作者は「人間の心を消失させる」という新たな機能を付与したのである。そのために、『竹取物語』には飛翔の道具として「飛ぶ車」が用意されているのである。

『竹取物語』は、冒頭と末尾の浪漫的な部分（かぐや姫の生い立ちと昇天）と、真ん中に位置する写実的な求婚譚とで成り立つ。内容も表現も異なるこの二つの要素に統一的な主題は一見、見出しにくい。しかし、月の人と人間との対比を中心に、かぐや姫の心の獲得と喪失という視点から見れば、物語は一貫して人間の「心」を主題としていることがわかる。つまり、もともと月の人であり、心を持たなかったかぐや姫が、求婚譚を通して求婚者たちの取り組みを見る中で、また帝との交流の中で、そして翁・嫗との関係の中で人間的な感情を獲得し、帰るときにはそれを失って帰るという構造である。求婚譚は、かぐや姫が人間の心を学ぶ過程であるともいえる。

国定国語教科書「かぐやひめ」において、かぐや姫が月に帰る場面で羽衣による心の喪失は描かれない[20]。そればかりか、原典にはない台詞を追加することで、かぐや姫は心を失わずに月に帰ることになっている。昇天場面のかぐや姫の台詞は次のようなものである。

> 今　お別れ　申すこと　は、まこと　に　かなしう　ございますが、いたし方　が　ありません。月夜の　晩　には、どうか、私　の　こと　を　思ひ出して　下さい。私も、お二方　の　ごおん　は、けっして　忘れません[21]（第四期）。

> とうとう　お別れしなければ　ならない　時が　まゐりました。お二人の　ご恩は　けっして　忘れません。どうぞ、月の　夜には、私の　ことを　思ひ出して　ください。私も、あの　月の　世界　から、お二人を　拝んで　をりませう[22]（第五期）。

どちらにも恩を忘れないという台詞が追加されている。この台詞によって、かぐや姫は月に帰ってもなお育ての親である翁・嫗への恩を忘れない、孝行な娘に作り替えられているのである。

『竹取物語』の主題を考えるのであれば、『竹取物語』と国定国語教科書「かぐやひめ」を

比較した際、最も大きな改変はこの「ご恩はけっして忘れません」という台詞の追加であるといえる。『竹取物語』における重要な要素である求婚譚を一切省き、また月の人と人間との対比を一切欠く国定国語教科書「かぐやひめ」は、原典『竹取物語』とは大きく異なる。このように原典と異なる「かぐやひめ」はなぜ国定国語教科書に採録され、どのような役割を担わされたのであろうか。

Ⅲ．第四期・第五期国定国語教科書の思想

1．第四期「サクラ読本」の思想

『竹取物語』に基づく「かぐやひめ」が作られた背景には、どのような意図があったのか、まず第四期国定国語教科書の思想について見ていく。「サイタ　サイタ　サクラガサイタ」から始まるこの教科書は、「サクラ読本」とも呼ばれる。

「かぐやひめ」が採録されている巻四の教材は、「富士の山」「早鳥」「海軍のにいさん」「カケッコ」「かぐやひめ」「たぬきの腹つゞみ」「月と雲」「ヲヂサンノウチ」「山がら」「山がらの思出」「大江山」「鬼ごっこ」「いうびん」「ニイサンノ入營」「すゞめ」「白兎」「豆まき」「百合若」「ひなまつり」「北風ト南風」「羽衣」の全二十一課である[23]。このうち、第四期より前から教材として採録されているのは「富士の山」「山がら」「大江山」「白兎」「ひなまつり」「羽衣」で、多くの教材が第四期から新たに加えられたものであることがわかる。

第四期国定国語教科書が編纂された時期の特徴について、海後宗臣・仲新は次のようにまとめている。まず、昭和初年頃は、新しい国語教育論が起こり、当時の読本の教材にも批判が加えられるようになったという[24]。特に、「読み方教育によって全人間的自己創造をはかるべきであるとの教育思想が強く主張されてきた」[25] ことが指摘されている。また、同時にこの時期は「新しく児童のための文芸雑誌が創刊され、童謡と童話の文学が生まれ、多くの文学者、詩人が児童文学を創作した」[26] 時期でもある。海後・仲は「サクラ読本」の特徴について次のようにまとめる。

> 新読本は大正より昭和はじめにかけての一般教育思想と国語教育思想、更に児童文学観の影響によって、教材の児童化、生活化、文学化がなされ、さらに満州事変以後の国粋主義思想による教材も加わっている。これらの特色が一つになっているのであって、教材の児童化、生活化、文学化も国家主義の立場よりなされている[27]。

そして、こうした点は「すでに、第二期、第三期国定国語教科書において芽生えていた教材観であって、それが昭和初期の社会情勢を背景として大きく実現されたとみるべきであろう」[28] とも指摘する。

また、唐澤富太郎は「サクラ読本」について、「一見のどかな『サクラ読本』にも、その背後には満州事変を契機とした日本のファッショ化の嵐が吹き荒れていた」[29] と述べる。具

体的な特徴として、古典の重視を挙げ、「このような教材の登場も、当時の国粋主義的な思想の高調と無関係ではなかつた。（中略）日本の文化的遺産を児童に伝えようとしたのであつた」[30] とも指摘する。唐澤は、「サクラ読本」の基本的な性格を「ファシズム強化の国民教育」[31] であるとしながら、「しかし一方、これを前期の第三期国語教科書に比すると、文学的教材をはるかに多く採り上げ、説話、寓話、童話などを重視して、児童の心理に適応した教材が多くなつた点は見逃すことが出来ない」[32] と、その文学的教材の多さにも着目している。

唐澤は、国語教科書の各課を内容ごとに分類し[33]、その割合をまとめている。それによると、「サクラ読本」にあらわれる教材のうち、「文学的内容」の教材は 54.1%（307 課中 166 課）にのぼる[34]。第一期から第五期までの中で、最も文学的内容の教材の比率が高いのが第四期「サクラ読本」ということになる[35]。つまり、「サクラ読本」は国家主義的な性格を基本としながら、当時の児童文学への関心などもあり、文学的教材が多く採録された教科書だったといえる。

古典教材の重視も「サクラ読本」の特徴とされているが、「かぐやひめ」が採録されている巻四には『古事記』を出典とする「早鳥」「白兎」も含まれる。「サクラ読本」では、『古事記』を題材とする課が第三期までと比べてほぼ倍の数に増えている[36]。そして、そのほとんどが『古事記』の構成をなぞる順番で配置されており、採録されているエピソードは上巻の神代の部分が大半である[37]。棚田真由美は国定国語教科書の『古事記』採録方法の特徴について「上巻部分の神代の話に重きを置いた点だといえる。そのように、『古事記』の中でも特に神代の話を取り上げることで、人の代につながるものとしての神の代を強調しようとしたと思われる」[38] と指摘する。『古事記』を出典とする教材は、日本は神々の治めてきた国であり、それが現在の天皇にもつながっているという天皇の権威化のために採録されたと考えられる。

一方で、「海軍のにいさん」や「ニイサンノ入營」のような軍事的な教材も追加されている。「海軍のにいさん」は海軍の兄が帰ってきた日の様子を弟の目線で描いている教材であるが、「ぼく　も、大きく　なったら　海軍　だよ、にいさん」「さう　だ、海軍　がいゝ。大ぢゃうぶ　なれる　よ」[39] という兄弟の会話などがあらわれる。挿絵として、兄の「大日本軍艦加賀」という金文字の入った帽子をかぶり、敬礼する少年の姿が描かれている。

「ニイサンノ入營」では、兄が入営する様子を、やはり弟の目線から描いている。

> 停車場デハ、村長サン、校長サン、ザイガウ軍人、青年クンレン所　ノ　人タチ　ガ、大ゼイ　集ッテ　ヰマシタ。ニイサン　ヲ　見ル　ト、
> 「オメデタウ。」
> 「オメデタウ。」
> ト　イヒマシタ[40]。

『古事記』の神代の話を時系列で数多く採録すること、軍事的な題材を子どもたちの目線で描く教材を追加することで、天皇を権威化、神格化する意図や、国家主義的な思想を教えようとする意図が見てとれる。

一方、文学的内容の教材が多いことも「サクラ読本」の大きな特徴であった。この時期は児童文学への関心も高い時期である。大正期には識字率が上がり、学習年齢児童の95%が就学しているという状況になり、子どもも文学作品の「読者」と考えられるようになる[41]。1918年には鈴木三重吉によって芸術性の高い、子ども向けの雑誌『赤い鳥』が発刊された。こうした背景もあり、「サクラ読本」は文学的内容の教材を多く含み、読み物として児童にとって魅力的なものでもあったようである。1933年に尋常高等小学校に入学した「サクラ読本」一期生である福田隆義は、教科書の内容を鮮明に覚えているという。

> 私は「シタキリスズメ」も「ウサギトカメ」も「モモタロウ」も「サルトカニ」「ネズミノヨメイリ」「コブトリ」「花サカヂヂイ」「一寸ボフシ」「かちかち山」「ねずみのちえ」「金のをの」「浦島太郎」「かぐやひめ」「羽衣」……も、一・二年生の教科書で出合った。当時は、面白かった。暗唱するほど読んだ。『サクラ読本』が文学読本だったとか、文学的すぎたと言われる理由の一つだろう[42]。

文学的でもあった「サクラ読本」であるが、生徒たちの思想に大きな影響を与えたこともうかがえる。福田はその影響について次のようにまとめている。

> 第二次大戦でアメリカ軍の空襲が始まったころ、私は神風を信じ、期待し、祈った。今ふうに言えば、マインドコントロールされた青年に育っていた。ブンガク読本が、とんでもない青年を育てる一助だったことは確かだ。それに加えて「修身」という教科があった。「國史」があった。「儀式」（元旦・紀元節・天皇節・明治節）があった。これらが一丸となって、皇民化教育がおしすすめられていたからである[43]。

唐澤は、「国語は児童の情操を養う教科の中でも、最も重視されていた教科であつたから、その美しい文学的表現のうちに、児童をして知らず知らずのうちに国家主義的なものに引き入れようとする試みがなされた」[44]と指摘する。一見、唐澤による分類の「ミリタリズム的」・「ナショナリズム的」[45]な内容ではない「文学的」な教材の中にも、当時、国として子どもたちに授けたかった思想が埋め込まれていたといえる。

「かぐやひめ」は、もとになっている『竹取物語』が日本の物語の出発点である、古典文学作品であるという点で重要であるが、「サクラ読本」においては、文学的な童話としての位置づけであると考えられる。竹から生まれ、月に帰るかぐや姫という主人公は人間離れしている。このかぐや姫の出生と昇天の部分だけを見れば、『竹取物語』は子どもたちが面白

く感じる超自然的な、文学的な童話の一つである。そのため、写実的・現実的で子どもたちに馴染みのない求婚の話は一切削除され、かぐや姫という主人公を中心に、その生い立ちと昇天だけをまとめるという形になったと考えられる。そして、その中から教訓を読み取るとすれば、原典にはなく国定教科書において追加された「恩」ということになる。

「恩」が重要であるということは、「修身」の教科書においても度々強調されている。例えば、第四期修身教科書の巻二の二十七課「ヨイ　子ドモ」には次のような記載がある。

> マタ、太郎　ハ、トモダチ　ニハ　シンセツ　ニ　シ、人　カラ　受ケタ　オン　ヲ　忘レズ、イツモ　テンノウヘイカ　ノ　ゴオン　ヲ　アリガタク　思ッテ　ヰマス[46]。

また、巻三・四・五の最後はどれも「よい日本人」という課でしめくくられている。巻三の二十七課「よい日本人」には次のような記載がある。

> よい日本人となるには、いつも、天皇陛下・皇后陛下の御德をあふぎ、皇大神宮をうやまひたつとんで、忠君愛國の心をさかんにしなければなりません。（中略）父母に孝行をつくし、先生をうやまひ、學校を愛し、友だちは仲よくして助け合ひ、近所の人にはしんせつにすることが大切です。（中略）さうして、人から受けたおんを忘れないばかりでなく、きそくをよくまもつて、人のめいわくになるやうなことをせず、進んで、世の人々のためにこうえきをはかるやうにしなければなりません[47]。

修身において明言されている「恩」や父母への孝行は、国語科の「かぐやひめ」においては童話の中に教訓として埋め込まれている。超自然的な伝説・童話としての「かぐやひめ」に月に帰ってもなお、両親への恩を忘れないという思想が埋め込まれ、結果的に原典の『竹取物語』では最も重要な要素であった月の人と人間との対比は「かぐやひめ」からは消滅してしまっている。

「かぐやひめ」が採録された背景には、「サクラ読本」における「教材の児童化、生活化、文学化」[48]があり、文学的教材の一つとして『竹取物語』が童話化されたものと考えられる。同時に、国家主義の立場から「恩」を重視するという教訓も担わされたといえる。

2. 第五期「アサヒ読本」の思想

第五期の国定国語教科書は、第四期の「サクラ読本」の特徴を引き継ぎながら、国家主義的な傾向をさらに強くした戦時教材となっている。「アカイ　アカイ　アサヒ　アサヒ」で始まる「アサヒ読本」の特徴について、海後・仲は次のように指摘する。

> 第四期国定国語教科書に現われた国家主義的傾向が、この期の読本には非常に強く打ち

出されて戦時教材となっている。たとえば、児童生活より取材するといっても、戦時下における少国民としての生活であり、情操教育の重視といっても、戦争下における国民感情育成に力が注がれた[49]。

採録されている教材を見てみると、第五期では「ナショナリズム的内容」（皇室・国家など）の教材が 4.3%、「ミリタリズム的内容」（軍事・戦争など）の教材が 14.4% といずれも第一期から第五期の中で最多となっている[50]。第四期は「ナショナリズム的内容」の教材が 2.2%、「ミリタリズム的内容」の教材が 5.5% であり、第五期になってこうした教材がさらに増加していることがわかる[51]。

「かぐやひめ」が採録されている「よみかた四」は、第四期の巻四から四課増えた全二十五課から成る。このうち、第四期の巻四と第五期の「よみかた四」に共通して採録されているのは、「富士山」「早鳥」「海軍のにいさん」「かけっこ」「かぐやひめ」「たぬきの腹つづみ」「いうびん」「にいさんの入營」「白兎」「豆まき」「おひな様」（第四期では「ひなまつり」）「北風と南風」「羽衣」の十三課である[52]。「これは　満州の　話　です」[53] から始まる「金の牛」や、「満州の冬」といった満州関係の教材が追加されている他、「支那の子ども」という教材も追加されている。

また、「海軍のにいさん」「にいさんの入營」に加えて、「病院の兵たいさん」という子どもが、戦争で負傷した兵士のいる病院へ慰問に訪れる様子を描く教材なども追加されている。「金しくんしゃう」には「昔、神武天皇のお弓に止った　あの金のとびが、今、軍人さんの胸にかがやいて、りっぱなてがらを　あらはしてゐるのです」[54] という記述がみられる。「菊の花」では「天皇陛下の　おぢいさま、 明治の　みかどを　あがめませう」[55] という記載もある。第四期の教材以上に、「ミリタリズム的」[56] 内容や天皇への言及が多くなっていることがわかる。

「ミリタリズム的」[57] 内容や記述、天皇を賛美する記述が増え、満州・支那に関する教材が追加される中で、「かぐやひめ」は引き続き、同じような内容で採録されている。「かぐやひめ」に関しては、第四期と第五期は非常に似た内容になっており、細かい言い回しや表現以外の異同は少ない。しかし、その少ない異同から第五期「アサヒ読本」の位置づけが見える。そのため、第四期から改訂された点を見ていく。

変更点として、かぐや姫に関する点があげられる。まず、三月で成長した娘の年齢が第四期では「十五六ぐらゐ」[58] であるのに対し、第五期では「十七八ぐらゐ」[59] となっている。また、求婚を拒否するかぐや姫の様子にも変更が加えられている。多くの男性が嫁にほしい、というのに対して、第四期では、「かぐやひめは　どうしても　しょうち　しません。おぢいさん　も、『じぶん　の　ほんたう　の　子　で　ない　から、私　の　思ふ　やうには　なりません。』と　いって　ゐました」[60] と書かれている。一方、第五期では、「何ごとにも　すなほな　かぐやひめ　でしたが、いつも　おぢいさんに『私は、どこへも　まゐ

りたう　ございません』と　いって、ことわって　もらひました」[61] となっている。第五期では「何ごとにもすなほなかぐやひめ」という記述が追加されていることがわかる。第四期においては「どうしてもしょうちしません」と、頑固に見えるかぐや姫であるが、第五期では普段は「何ごとにもすなほ」であることが追記され、おじいさんが自分の本当の子ではないので思うようにならない、と言う部分は削除されている。代わりに「私はどこへもまゐりたうございません」という理由が追加され、おじいさんに頼んで断ってもらう、という形になっている。この変更により、かぐや姫は普段は何事にも素直で親の言うことをよく聞く娘であるが、「どこにも行きたくない」という理由で求婚だけは拒否した、という印象に変わっている。

また、「とのさま」に関する記述にも変更がある。すでに指摘したように、第五期には「とのさま」からの求婚については一切言及がない。原典『竹取物語』における帝の求婚は、第四期では「とのさま」からの求婚があったが断った、という簡単な記述として登場し、第五期では一切出てこなくなる。第五期においても、月の人からかぐや姫を守るための兵は「とのさま」の兵ということになっているが、第五期では求婚していない、それまで接点のない「とのさま」が兵だけ派遣する形になっている。

第四期においては、求婚したということで一度登場している「とのさま」におじいさんが相談するという形である。「さうして、この　こと　を　とのさま　に　申し上げますと、とのさま　は、『それ　では、その　晩　には、兵たい　を　たくさん　やって、月の　都　の使　が　來たら、追ひかへして　しまはう。』と　おっしゃいました」[62] とある。

一方、第五期ではここで「とのさま」が初めて登場するため、「とのさま」への相談はおじいさんが熟考の末思いついた策であるとされている。「おぢいさんは　考へに　考へたすゑ、この　ことを　とのさまに　申しました。すると、とのさまは、『それは　ざんねんで　あらう。よし、その　晩　けらいたちを　たくさん　やって、おまへの　うちを　守らせる　ことに　しよう。』と　おっしゃいました」[63] となっている。

また、求婚をしたという記述はない一方で、第五期では「兵たい」たちが「とのさま」の派遣であることが強調される。第四期では単に「兵たい」[64] となっていた兵が、第五期では「とのさまのけらいたち」[65] とされており、「とのさま」が派遣した兵であることがより強調されている。「とのさま」が求婚して断られるという事態を削除し、一方で兵については「とのさまのけらい」であることを強調することにより、「とのさま」の権威がより強調される結果となっている。

さらに、おじいさん・おばあさんとの関係に関しても改変が見られる。例えば、月から迎えが来ることを告白する場面のかぐや姫の台詞は、第四期が「みなさん　に　お別れするの　が　つらくて、泣いて　ゐる　のでございます」[66]、第五期が「私は、お二人に　お別れするのが、何よりも　悲しう　ございます」[67] となっている。お別れする対象が「みなさん」から「お二人」に変わることで、より両親との別れが強調されているといえる。また、

第四期にはない次の記述が第五期にある。「おばあさんは、しめきった　一間の　中で、しっかりと　かぐやひめを　だいて　をります。おぢいさんは、その　入口に　立って　番をして　をります」[68]。これと対応して、迎えが来たあとにも次のような記述が追加されている。「すると、しめきった　一間の　戸が、ひとりでに　あきました。おばあさんの　手に、しっかりと　すがりついてゐた　かぐやひめの　からだは、 ひとりでに　外へ　出て行きました」[69]。かぐや姫の最後の台詞は、第四期・第五期ともに似たものになっているが、第五期では「ご恩を忘れない」ということの他に「私も、あの　月の　世界から、お二人を　拜んで　をりませう」[70] という台詞が追加されている。

国家主義的な思想が強くなる第五期の国定国語教科書においても、「かぐやひめ」は、文学的内容の教材という位置づけで採録されていると考えられる。しかし、第四期からの変更点を見ると、かぐや姫はより素直で孝行な娘とされ、作中の権力者である「とのさま」の権威がより強調されていることがわかる。

Ⅳ. 現代への影響

1. 童話としての「かぐやひめ」受容

第四期・第五期の国定国語教科書には、当時の社会情勢を反映した国家主義的な思想が色濃く現れているといえる。「かぐやひめ」は軍国主義的な要素や、天皇崇拝の記述がある教材ではないが、原典『竹取物語』の帝を第四期では「とのさま」とし、第五期では「とのさま」ですら求婚のエピソードは描かないことなど、天皇への配慮はうかがえる。また、『竹取物語』の主題である月の人と人間との対比は、かぐや姫を「素直な良い子」、「親への恩を忘れない子」に作り変えることで消滅してしまっている。

原典にはない「親への恩」が追加されてはいるものの、「かぐやひめ」が採録された背景には、「赤い鳥運動」に代表される児童文学への関心もある。つまり、「かぐやひめ」は『竹取物語』を典拠とした教材でありながら、教材化の過程で子どもがわかりやすく、共感しやすい童話に作り替えられたのである。

国定教科書「かぐやひめ」は、原典『竹取物語』の中の童話的な部分を取り上げてまとめ直したものである。第五期の教師用教材『よみかた 教師用第四』の各説「かぐやひめ」の箇所には、次のように書かれている。「わが國物語文學の祖といはれる竹取物語は、美しい童話的な傳説を骨子とし、平安時代人の現實生活によつて具現した小説であるが、本教材は專らその童話的傳説的要素を取上げて、兒童の心情に適應する説話としたものである」[71]。つまり、もともと『竹取物語』がもつ童話的・伝説的な部分だけを採用し、子どもに理解しやすい説話としてまとめ直したものであるといえる。原典の童話的要素として、『よみかた教師用第四』には次のような指摘もある。

この説話の興味は、傳奇的、幻想的なところにある。根もとの光る竹の中から小さな女

の子を見つけたことや、手のひらの上にものせられるやうな小さな女の子が三月程度で十七八ぐらゐの美しい娘になり、しかも光るやうに美しく家の中も明るいほどなので、かぐや姫と名づけたことなど、童話としての興味が深い[72]。

こうしたかぐや姫の非人間的な要素は、たしかに童話的である。しかし、『竹取物語』においてかぐや姫が非人間的であるのは月の都の人であるからであり、それは心を持つ人間を相対化する装置であった。子ども向けに、童話的な部分だけを取り出してまとめれば、もとの物語の主題は見えなくなる。

国定国語教科書において教材化された「かぐやひめ」は当時、童話として解釈されていたことがわかる。蘆谷重常は 1936 年に出版された『國定教科書に現れたる國民説話の研究』において、「國語讀本における『かぐやひめ』は、此の説話を完全に童話化したもので、粗樸な筆づかひの中に、神韻漂渺な妙味を藏してゐる」[73] とまとめている。また、1944 年に出版された島津久基の『日本國民童話十二講』には、「国民童話」と考えられる童話が十二個取り上げられている[74]。この中に「かぐや姫」も選ばれている。島津は『竹取物語』について「中古童話の代表者は、何といつても竹取物語であらう。これも國民學校の教材に採用されてゐること、周知の如くである」[75] と述べる。そして、第五期国定国語教科書の「かぐやひめ」について「原作の成人向の要素竝びに平安時代的特殊背景を捨去したもの」[76] と指摘する。両者ともに国定国語教科書の「かぐやひめ」が『竹取物語』を童話化したものととらえている。

島津は国民童話を一地方だけの特殊な民間口碑でなく、「國民一般に知られ語られ親しまれてゐる童話で、且文學化されて（文字による童話の形となり）一層國民全體のものとなつてゐるもの」[77] と定義している。そして、こうした「国民童話」には「最もよく國民性や國民精神や時代精神が現れてゐることは、これ亦申すまでもない」[78] という。蘆谷も、説話を国民説話と外来説話（海外の説話）とに分け、国民説話が「特に重視せらるゝのは、それが國民精神の涵養に適當であるからである」[79] と述べる。日本の説話をもとにした童話には、国民性が表れ、それが国民精神の涵養に適しているというのである。

また、島津は「童話は夢である。國民童話は國民の夢である」[80] とした上で、「即ち童話は單なる夢ではない。兒童にとつては絶對の大きな訓である」[81] と指摘し、「そのためになるのも、理念や教訓があんまりはつきりし過ぎてゐては又、童話はすつかり興ざめたものになる」[82] と述べる。つまり、童話は子どもにとって「大きな訓」であるが、それがあからさまに示されるのではなく、あくまでお話として面白く、楽しめるものである必要があると考えているのである。蘆谷も同様の趣旨のことを、説話を教材とする意義として述べる。蘆谷は、説話を教材とすることの利点として、説話が興味的であること、具象的であることの二点を挙げている[83]。つまり、児童にとって興味深く、また具体的でわかりやすいということである。蘆谷は「格言や教訓の百萬駄羅を並べるよりも、簡単な、繪畫的な、劇的な説話を

一つ聞かせる方が遙に効果が多い」[84] とし、「説話でなくては得られない、偉大なる教育効果がある」[85] と結論づける。

そして、『竹取物語』は古典文学作品であると同時に、古い童話であるとも考えられていたことがわかる。蘆谷は『竹取物語』について、「わが國に於ける假作物語の元祖であると共に、又、世界で最も古い創作童話の一つで、この物語を有つことは、わが國文學の誇り、また童話文學の誇りであるといつてよい」[86] という。島津も、原典『竹取物語』もその骨子は童話的であり、それが「国民童話」として定着したと考えている。

> 要するに竹取物語は、國民童話的素材を用ゐて創作せられた古代の藝術童話の一であり（中略）そしてそれが繙讀弘布の間、その素材的内容と興味ある話術態度とから、更にもう一度新に國民童話としての生命を國民に確認せしめつゝ、おのづから日本國民童話としての不動の位置を獲得したものと見るべきであらう[87]。

原典『竹取物語』自体に童話的な要素があり、国定国語教科書においてその童話的な要素のみがまとめ直されて、「かぐやひめ」という童話が誕生したと考えられていたといえる。先に指摘したように、『竹取物語』は 1889 年にはすでに「日本昔話」の枠組みで、「桃太郎」や「浦島太郎」と並んでちりめん本化されていた。しかし、この時点では原典の内容が省略されることはなく、求婚譚や帝の求婚も含めた全訳であった[88]。天の羽衣によって心を失うということも言及されている[89]。つまり、国定教科書の「かぐやひめ」は『竹取物語』が教材化されるにあたり、童話化されたものでもある。そして、この原典の主題を欠いた「かぐやひめ」は、現代のおとぎ話「かぐや姫」のルーツでもある。

2. 現代のおとぎ話としての「かぐや姫」

戦後、GHQ による民主化の中で、教科書の内容も見直されていく。例えば、「かぐやひめ」と同じ「国民童話」に位置付けられる「桃太郎」は、「『軍国主義』をイメージさせるとして教科書教材からその姿を消し、今日に至っている」[90] と指摘される。一方、「浦島太郎」は墨ぬりの対象にもならなかったことから、中嶋は「国家主義や軍国的な思想を表立って主張するような教材ではなかったということである」[91] と述べる。

「かぐやひめ」も「浦島太郎」と同様に、国家主義的・軍国主義的な思想を明確に示す教材ではなかったため、戦後も削除されることなく残された。ただ、教科書における「かぐやひめ」は、戦後になると原典『竹取物語』により近い形になる。1947 年から使用された第六期の国定国語教科書の「かぐやひめ」には、五人の求婚者の求婚譚が短いながらも登場する[92]。また、帝の求婚も詳細に採録され、かぐや姫昇天の場面では、以下のように不死の薬・天の羽衣にも言及する。

天人が　はごろもを　きせようと　すると、かぐやひめは、「もう　すこし　おまちください。」と　いって、みかどへ、おわかれの　手紙と　ふしの　くすりを　のこしました[93]。

昇天場面のかぐや姫の台詞として、「いつまでも　おそばに　いて、こうこうを　したいと思いましたのに」[94] とあるものの、「恩を忘れない」という趣旨の言葉は登場しない。教材の中の「かぐや姫」、あるいは古文教材としての『竹取物語』は、戦後においては原典に近い形で用いられていく。一方、戦時下において童話化された「かぐやひめ」は、現代のおとぎ話「かぐや姫」にその特徴が受け継がれていく。

第四期・第五期国定国語教科書において追加された「ご恩は一生忘れません」という台詞は、現代の子ども向けの絵本においても好まれる。例えば、「ごおんは　わすれません。いつも　月から　おふたりを　みています」[95]、「ありがとうございました。ごおんは　けっして　わすれません」[96]、「ごおんは　いっしょう　わすれません」[97] というように、多くの子ども向けの絵本に「恩を忘れない」という台詞が出てくる。

また、第五期において「何ごとにもすなほ」とされたかぐや姫であるが、こうした素直で良い子のかぐや姫像も現代の絵本「かぐや姫」に受け継がれている。例えば、原典にはない「ボロボロの着物を喜んで着た」というエピソードを追加している例もある[98]。また、かぐや姫が翁・嫗になついていた様子を描くものとして、「しかし　いえの　中に　ばかり　いて、出かけようとも　しません。『この　いえで、お二人の　そばに　いるのが　一ばんすてきですもの』それを　きくと、おじいさんも　おばあさんも　うれしく　なるのでした」[99] という記述を追加するものもある。

第五期の国定国語教科書において、「何ごとにもすなほ」なかぐや姫が求婚だけは断ってもらっていた、という記述があるが、現代の絵本においても二人のそばにいたいので求婚を拒否するという形になっているものがある。例えば、「ご安心ください。わたしはお二人のおそばにいるのが一番の幸せなのです」[100] というような例である。

原典『竹取物語』において、かぐや姫は決して素直な良い子というキャラクターではない。結婚の拒否も、人間ではなく月の人であるために、受け入れることができないという形である。結婚するように勧める翁にかぐや姫は「なんでふ、さることかしはべらむ」（どうしてまた、結婚などをするのでしょうか）[101] と問いかける。それに対して翁は「変化の人といふとも、女の身持ちたまへり」（変化の人といっても、あなたは女の身をもっていらっしゃる）[102] と答える。つまり、人間ではない「変化の人」であるのはわかっているが、それでも人間の女の身体を持っているのだから、と説得しているのである。このように、原典『竹取物語』においては、かぐや姫は人間ではない存在であることが示され、翁が人間世界のしきたりを説明するような構造になっている。

かぐや姫は、難題に挑み失敗する求婚者に対しても冷たく、命を落とした五人目の求婚者

にだけようやく「すこしあはれ」（すこし気の毒）[103] と思ったとある。原典『竹取物語』からは、「素直で良い子」という印象を抱くエピソードや記述はなく、一方で人間ではない「変化の人」としての記述が見られる。原典『竹取物語』におけるキャラクター像とは異なるにも関わらず、国定教科書で生まれた素直で、月に帰っても恩を忘れないかぐや姫が、現代のおとぎ話「かぐや姫」にも受け継がれている。

国家主義的な思想を持つ国定教科書というコンテクストを離れても、童話化された「かぐやひめ」はそのままおとぎ話「かぐや姫」として現代まで受け継がれている。そして、これが多くの日本人が触れる『竹取物語』の受容の一つなのである。

V．結論

戦時下の国定国語教科書における「かぐやひめ」は、『竹取物語』の教材化の例として重要であると同時に、童話化の過程としても重要である。第四期国定国語教科書においては、国家主義的な思想と児童文学への関心の高まりを背景に、『竹取物語』も児童にわかりやすく面白い、文学的な童話に作り替えられたといえる。そして、教訓として親への「恩」が強調された。より国家主義的・軍国主義的傾向を強めた第五期国定国語教科書においても、「かぐやひめ」は概ね第四期と同様の内容で掲載された。しかし、第四期からの改変によりかぐや姫は素直な娘として描かれ、「とのさま」という権力者の権威が強調される結果となった。

戦時下の教科書には、「かぐやひめ」以外にも島津が「国民童話」に分類する童話が数多く採録された。主人公が鬼退治をする「桃太郎」のように、軍国主義的なイメージを担わされ、戦後削除の対象となるものもある。「かぐやひめ」は軍国主義・国家主義の思想を明確に表すものではないが、こうした思想の色濃い教科書の枠組みの中で童話化されたといえる。『竹取物語』という古典の物語作品を典拠とする点が、「かぐやひめ」が他の「国民童話」教材と異なる点である。原典からの改変を見ると、親への恩の追加や権力者への配慮から、軍国主義教育において「かぐやひめ」が担わされた役割も見えてくる。そして、この軍国主義教育の中で教材化、童話化された「かぐやひめ」がおとぎ話「かぐや姫」として今日まで受け継がれている。

註

1) 第一期は 1904 年 – 1909 年、第二期は 1910 年 – 1917 年、第三期は 1918 年 – 1932 年、第四期は 1933 年 – 1940 年、第五期は 1941 年 – 1945 年、第六期は 1947 年 – 1949 年に使用された。
2) その前に第二期の修正『尋常小学読本』巻六にも採録されているが、広く使われた教科書としては第四期が初出で、先行研究においても第四期のものからが対象とされている。
3) 中嶋真弓「小学校国語教科書教材『かぐやひめ』採録の変遷」、『学び舎――教育課程研究』5 巻、愛知淑徳大学教育学会、2009 年 3 月、12–26 頁。
4) 金子美保「国定国語教科書における『竹取物語』の教材化」、『横浜国大国語教育研究』10 巻、

横浜国立大学、1999 年 5 月、14–17 頁。

5) ちりめん本とは、欧文の物語と絵で構成された和綴本である。*Princess Splendor: the wood-cutter's daughter.* は 1889 年に E. Rothesay Miller の英訳で作られた。「日本昔話」というシリーズで「桃太郎」(*Momotaro or Little Peachling.*) や「浦島太郎」(*Urashima, the Fisher-boy.*) と並んで作成されているが、簡略化された童話ではなく原典の全訳に近い。

6) 海後宗臣・仲新 編『日本教科書大系 近代編 第 7 巻』、講談社、1963 年、636–637 頁。

7) 海後宗臣・仲新 編『日本教科書大系 近代編 第 8 巻』、講談社、1964 年、411 頁。

8) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 7 巻』、637 頁。

9) 各務虎雄「五 かぐやひめ 要説」、国語教育学会編、『小学国語読本綜合研究』巻 4、岩波書店、1938 年、37–38 頁。

10) 残りの三人は右大臣・大納言・中納言である。

11) 文部省『よみかた 教師用』第 4、文部省、1941 年、45 頁。

12) 高橋宣勝『語られざるかぐや姫——昔話と竹取物語』、大修館書店、1996 年、160 頁。

13) 同上。

14) 金子、前掲論文、17 頁。

15) 片桐洋一校注『竹取物語』、新編日本古典文学全集 12、小学館、1994 年、74 頁。

16) 同上。

17) 同上。

18) 同上、75–76 頁。

19) 羽衣説話は、天女が何らかの理由で羽衣を人間に奪われ、一定期間人間世界にとどまったのち、羽衣を取り返して天に帰るという基本的な型を持つ。

20) 第四期・第五期には羽衣自体が登場せず、第六期には羽衣が登場するが、羽衣を着ることによってかぐや姫が人間的な感情を失うという記述はない。

21) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 7 巻』、638 頁。

22) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 8 巻』、412 頁。

23) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 7 巻』、631 頁。

24) 海後宗臣・仲新 編、『日本教科書大系 近代編 第 9 巻』、講談社、1964 年、608 頁。

25) 同上。

26) 同上。

27) 同上、610 頁。

28) 同上、614 頁。

29) 唐澤富太郎『教科書の歴史——教科書と日本人の形成』、創文社、1956 年、452 頁。

30) 同上、454 頁。

31) 同上、459 頁。

32) 同上。

33) 内訳は文学的内容、歴史的内容、科学的内容、社会的内容、ナショナリズム的内容、ミリタリズム的内容、生活的内容である（同上、256 頁）。

34) 同上。

35) 「文学的内容」の教材の割合は、第一期では 32.8%（238 課中 78 課）、第二期では 38.7%（300 課中 116 課）、第三期では 51.5%（305 課中 157 課）、第四期では 54.1%（307 課中 166 課）、第五期では 48.4%（306 課中 148 課）である（同上）。

36) 棚田真由美「昭和戦前期小学校国定教科書における『古事記』の教材化に関する考察」、『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』99 巻、2000 年 10 月、93 頁。
37) 同上。
38) 同上。
39) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 7 巻』、634 頁。
40) 同上、647 頁。
41) クライン，ルドヴィッチ「大正時代・戦前の童話：児童の発見」、『アルザス日欧知的交流事業日本研究セミナー『大正／戦前』報告書』、国際交流基金アルザス・欧州日本学研究所 (CEEJA) 編、2014 年 8 月、3 頁。
42) 福田隆義「『サクラ読本』一期生の弁」、『文学と教育』、2002 巻 194 号、2002 年 4 月、42–43 頁。
43) 同上、44 頁。
44) 唐澤、前掲書、452–453 頁。
45) 同上、256 頁。
46) 海後宗臣・仲新 編『日本教科書大系 近代編 第 3 巻』、講談社、1962 年、246 頁。
47) 同上、266–267 頁。
48) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 9 巻』、610 頁。
49) 同上、617 頁。
50) 唐澤、前掲書、256 頁。
51) 同上。
52) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 8 巻』、404 頁。
53) 同上、413 頁。
54) 同上、424 頁。
55) 同上、409 頁。
56) 唐澤、前掲書、256 頁。
57) 同上。
58) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 7 巻』、636 頁。
59) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 8 巻』、411 頁。
60) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 7 巻』、636–637 頁。
61) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 8 巻』、411 頁。
62) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 7 巻』、637 頁。
63) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 8 巻』、412 頁。
64) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 7 巻』、637 頁。
65) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 8 巻』、412 頁。
66) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 7 巻』、637 頁。
67) 前掲、『日本教科書大系 近代編 第 8 巻』、411 頁。
68) 同上、412 頁。
69) 同上。
70) 同上。
71) 文部省、前掲書、45 頁。
72) 同上、46 頁。
73) 蘆谷重常『國定教科書に現れたる國民説話の研究』、教材社、1936 年、262 頁。

74) 「因幡の白兎」「かぐや姫」「桃太郎」「一寸法師」「猿蟹合戦」「五條橋」「舌切雀」「花咲爺」「かちかち山」「猿の生肝」「浦島太郎と俵藤太」「金太郎」の十二講である。

75) 島津久基『日本國民童話十二講』、山一書房、1944 年、28 頁。

76) 同上、31 頁。

77) 同上、9 頁。

78) 同上、10 頁。

79) 蘆谷、前掲書、3 頁。

80) 島津、前掲書、1 頁。

81) 同上、2 頁。

82) 同上。

83) 蘆谷、前掲書、2 頁。

84) 同上。

85) 同上。

86) 同上、257 頁。

87) 島津、前掲書、29 頁。

88) Miller, E. Rothesay. *Princess Splendor: the wood-cutter's daughter*. Kobunsha, 1889. 奥付には発行者として長谷川武次郎の名前もあり、Miller は著者とも訳者ともある。本論文では国立国会図書館デジタルコレクションを参照した。

89) "Having thus bade farewell to earth, wrapped in the shining mantle, —old Taketori's grief and all her own sorrow forgotten, —mounting the chariot, accompanied by hundreds of warriors from the moon, the Princess Splendor rose towards the skies and vanished into the bright moonlight." (Ibid. p.48)

90) 中嶋真弓「小学校国語教科書教材『浦島太郎』採録の変遷」『愛知淑徳大学論集 文学部・文学研究科篇』35、愛知淑徳大学文学部、2010 年 3 月、71 頁。

91) 同上、74 頁。

92) 第六期では、多くの人がかぐや姫との結婚を望んだことが書かれたあと、「たいていの　人は、あきらめて　しまいましたが、さいごまで　どうしても　あきらめない　人が、なん人か　のこりました。それで、かぐやひめは、その　人たちに　とても　むずかしい　ことを　いって、それが　できたら　およめに　いくと　いいました。けれども　かぐやひめの　いうようには、だれも　することが　できませんでした」（前掲、『日本教科書大系 近代編 第９巻』、61 頁）と簡単に求婚譚の顛末について記載されている。

93) 同上、63 頁。

94) 同上。

95) 『バンダイあそぶっくシリーズ 10 かぐやひめ』、BANDAI、2002 年、20 頁。

96) 『はじめてのめいさくえほん 13 かぐやひめ』、岩崎書店、2001 年、22 頁。

97) 『よい子とママのアニメ絵本 58 かぐやひめ』、ブティック社、1990 年、43 頁。

98) 同上、7 頁。

99) 『日本昔ばなしアニメ絵本 4 かぐやひめ』、永岡書店、2006 年、9–11 頁。

100) 『ハローキティのかぐや姫』、株式会社サンリオ、2006 年。

101) 『竹取物語』、前掲書、22 頁。

102) 同上。

103)　同上、56 頁。